

## 人種差別的な立法「永住取り消し法案」

CMIM 運営委員/外キ協事務局 さとう のぶゆき  
佐藤信行

現在、日本に暮らす外国人は約 330 万人となった。そのうち、中国・フィリピン・ブラジル・韓国などからのニューカマーの「永住者」は 89 万人にも上る。永住者たちは地域社会において、文字通り「多民族・多文化共生」のための働きを担っている。それにもかかわらず政府は今年 3 月、「育成就労法案」と共に「永住資格取り消し法案」「マイナンバーカードとの一体化法案」を閣議決定して国会に上程。

永住取り消し法案は、①在留カードの常時携帯など入管法上の義務に違反した場合、②税金や社会保険料を納付しなかった場合、③刑法で 1 年以下の懲役（執行猶予を含む）の判決を受けた場合、入管局が永住資格を取り消せる、としている。

しかし、たとえば税金や社会保険料の滞納に対して、督促や差し押さえなど現在の制裁制度に加えて、永住資格を取り消すのは、外国人であるが故の人種差別的立法である。この法案に対しては在日韓国民団や横浜華僑総会、在日コリアン弁護士協会をはじめ、多くの市民団体と弁護士会、そして外キ協や在日大韓基督教会など各教団・教区が反対声明を出し

た。またマイノリティ宣教センターは 4 月、英文の声明を出して、在日宣教師や関係団体に送った。

「改定法案は、永住資格を持つ者にかつてない不安感を抱かせていますが、改定案の真の狙いは、今後ますます増える移民や、非人道的な日本の難民認定制度で排除される難民申請者の人びとに対してです。将来の永住申請者が犯罪予備軍であるかのような印象を陰湿に伝え、これによって永住取り消しの理由を強調することを合理化しています」

しかし、このような当事者からの強い反対、市民団体の国会前シットインなどさまざまな反対運動にもかかわらず、国会は 6 月 14 日これら 3 法案を可決した。法案の実施は 3 年以内となっているが、国連の人種差別撤廃委員会は 6 月 25 日、永住取り消し法は人種差別撤廃条約に抵触する旨を日本政府に勧告した。闘いはこれからも続く。

### お知らせ

#### ●第 5 回 難民・移民フェス

日時：7 月 20 日（土）15 時～19 時

（雨天決行）

会場：東京都練馬区 平成つつじ公園

手作り雑貨、ダンスや歌のパフォーマンスを仮放免中の仲間たちと一緒に楽しむ「フェスティバル」です。マイノリティ宣教センターも協力しています。



#### 9 月以降の CMIM プログラム

▼マイノリティリーディングサークル 9 月スタート

READING サークル

マイノリティ聖書セミナー

創世記を读もうシリーズ3

マイノリティ聖書セミナー（定員 10 人）10 月スタート▲  
いずれも参加申し込み受付中。詳細は同封チラシを。

マイノリティ宣教センターニュース 第 23 号

2024 年 7 月 11 日発行

発行者：李省展

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田 2-3-18 日本キリスト教会館 52 号室

TEL: 03-6228-0509 Email: info@cmim.jp

デザイン・レイアウト：峯田敏幸



# CMIM NEWS

Center for Minority Issues and Mission

Spread the Tent of Inclusivity! 共生の天幕を上げよう!

E-mail : info@cmim.jp URL : https://cmim.jp

マイノリティ宣教  
センターニュース

vol.23 2024 年 7 月

## 一緒にうたれる雨

ちよん すふあん  
鄭守煥

在日大韓基督教会 総幹事  
マイノリティ宣教センター 理事



昨年 10 月に在日大韓基督教会の総幹事に選出され、マイノリティ宣教センターの理事に就任し、キリスト教界における多種多様な会議で人権活動の報告・発信をこれまで以上に受信することが多くなった。その中で今回、韓国 NCC と日本 NCC と外キ協が「2024 年 韓・日・在日教会 URM- 移住民 国際シンポジウム（5 月 13 日（月）～15 日（水））を韓国大田の「荒れ野（ピンドゥル）共同体教会」で開催した。その内容について分かち合うことができればと願う。

主題は「不平等と差別を超え—東アジアの和解と平和を求める 韓・日・在日教会の宣教課題」であった。主題講演（李起豪（韓神大学・平和教養大学教授））をはじめ、四人の発題者が韓国と日本から立てられ行われた。〈ナム・ジェヨン（非正規職対策韓国教会連帯常任代表/荒れ野共同体教会 担任牧師）、岡本拓也（日本 URM 協力幹事/日本基督教団 牧師）、コ・ギボク（雇われてるみんなのための移住民文化センター所長）、佐藤信行（在日韓国人問題研究所 顧問）〉。主題講演はもとより四人の発題者のなかには熱い思いから涙で言葉を詰まらせる場面もあり、全ての参加者の心に響くものがあったことは間違いない。

できることなら全ての講演・発題の内容について書き記したいところではあるが、ナム・ジェヨン牧師が墨画家：シン・ヨンボク氏（1941 年～2016 年/英国国教会大学 元客員教授）の「一緒にうたれる雨」という作品には、作家本人が込めた社会への警句があることを本人の言葉を交えて説明して下さったことが印象に残っている。『自負心は苦難を耐えさせます。物質的な助けよりは自負心を持たせることが大きな力になります。助けるということは傘を差し出すということではなく、一緒に雨にうたれるという

ことです。一緒に雨にうたれない慰めは暖かくありません。慰めは、慰められる人に自分が慰めの対象だという事実をもう一度確認させてくれるからです』〈シン・ヨンボク「談論」290〉。そしてナム・ジェヨン牧師は発題の締めくくりに、マルティン・ルーサー・キング牧師の“沈黙の意味”についての言葉をもって発題を締めくくった。『この社会的転換期の最大の悲劇は、悪人の圧政や残酷さではなく、善人の沈黙である』。

この発題を聞き終え聖書の言葉が頭をよぎった。『喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい』（ローマの信徒への手紙 12 章 15 節）。この瞬間も雨にうたれ続けている人々の存在が何と多いことか。傘を持っていない人、いや傘を奪いとられた人が、冷たい雨にうたれ続けているにもかかわらず、社会構造と人々の無関心がより多くの雨にうたれる人々を増やし続けているのが現実ではないだろうか。雨にうたれ続けている人々に沈黙をもって応えるのではなく、一緒に雨にうたれることが求められる。この国際シンポジウムで自身の足りなさ不甲斐なさを思い知らされ、何もできない自分でも一緒に雨にうたれることで誰かを慰めることができるのでは……。そして全ての人が冷たい雨にうたれることのない社会となる日まで、雨にうたれている人々によりそう者が一人でも多く存在することを願う、出会いときづきの場となった。

[文中略称]  
韓国 NCC : 韓国キリスト教教会協議会  
日本 NCC : 日本キリスト教協議会  
外キ協 : 外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会  
URM : 都市農村宣教委員会

### マイノリティ宣教センター賛同会費 2024 年度分納入で活動を支援してください

マイノリティ宣教センターは 2017 年、強まる在日コリアンへのヘイトスピーチへの抗いを、さまざまな形で生み出そうと活動することを求めて創設されたエキキュメニカルなキリスト教団体です。「マイノリティとは『誰』なのか」という問いを立て、ちいさなであいから生まれる変革にこだわり、「天幕を広げゆく」エキキュメニカルな活動を練り上げていきます。

海外教会をはじめとして、熱い賛同と数多くの支援の意志が示され協働が実現してきました。マイノリティ宣教センターの活動を積極的に支援する会員となってくださいますようお願いいたします。

すでに会員の皆様におきましては 2024 年度分の会費を入金いただきますようお願いいたします。

個人会員：年会費 一〇 3,000 円

団体会員：年会費 一〇 10,000 円

●ゆうちょ振替口座  
00160-6-487170 マイノリティ宣教

※ 他行からの場合は以下の通りです。  
●銀行名 ゆうちょ銀行（金融機関コード 9900）  
店番 019（〇一九）  
当座 口座番号 0487170  
マイノリティ宣教

## 国際人種差別撤廃デー集会

たづけ かずひさ  
CMIM 運営委員 / 日本 YMCA 同盟 **田附和久**

3月21日午後7時から9時まで、日本キリスト教会 柏木教会を会場として、今年国際人種差別撤廃デー講演会・合同祈禱集会在開催されました。

第1部の講演会では、早尾貴紀さんが「シオニズム運動における植民地主義(入植)の1世紀、構造的暴力(占領)の半世紀—〈10.7〉ガザ蜂起と軍事侵攻は突然始まったのではない」と題して、今、世界の人々の関心を最も集めているパレスチナをテーマに講演されました。

今、パレスチナで起きていることを、単純に「宗教対立」や「暴力の連鎖」と捉える見方は、マスメディア等を通して広く流布し、市民社会そして私たちキリスト教会の内部においても、深く浸透していますが、それらが端的に間違いであり、現状を正しく理解するためには、入植、占領を支えるシオニズム、そしてその根底にある植民地主義や人種主義の問題から目を背けることはできないのだということを、今回の講演を通してよく理解することができました。

まず昨年10月以降現在進行形で起きていることに関しては、封鎖されたガザへの攻撃は以前から繰り返し行われてきていたものであり、10月7日の蜂起は単にハマスだけではなくマルクス主義団体等も含む様々な団体合同による一斉蜂起であったこと、性的暴行等の残虐行為が行われたというイスラエル側の主張を支える証拠や証言は出てきていないこと等、日本のマスコミではほとんど報道されることのない事実を紹介いただきました。

続いて、この1世紀の歴史的文脈について詳しい解説をいただき、1917年バルフォア宣言、1948年ナクバ(イスラエル建国)、1967年第三次中東戦争による占領拡大等を区切りとしながら、シオニズムに基づく入植の拡大、そしてイスラエル建国以降の占領の拡大によって、一貫して民族浄化(Ethnic Cleansing)が進められてきたということ、さらには、多くの人たちが平和実現への期待を

かけた1993年のオスロ合意によって成立した体制も、実際には占領の外観を隠すために名ばかりの自治が与えられたに過ぎない、構造的暴力を支える体制であったこと等をわかりやすく説明していただきました。

日本の私たちに何ができるのかという会場からの質問に対しても、早尾さんは私たちが自らで考えるための様々なヒントを与えてくださいました。日本は本来ここまでイスラエル寄りではなかったにもかかわらず、オスロ体制以降、イスラエルと公然とつきあうようになり、とりわけ9・11以降は「反テロ」を旗印に日本もアメリカもイスラエル化を進めてしまった現実があると言います。オスロ体制下で、日本が欧米と共に自治政府への「援助漬け」に加わり、パレスチナ独自の経済発展を妨げ、占領体制を後押ししてきたという指摘も印象に残りました。欧米同様に植民地主義に加担し、その一翼を担ってきた日本であるが故に、それも仕方がないのだとあきらめてしまうのか、自らの内なる植民地主義を克服し、パレスチナの人々の占領への抵抗に連帯する道へと進むのか、私たち一人ひとりが問われています。

以前から、早尾さんはどんなに小さな講演会や勉強会であっても、声をかければ必ず駆けつけてくださっていましたが、この10月以降は、精神的にお辛いであろうにもかかわらず、従来以上に精神的に各地の様々な現場に足を運んでいらっしゃいます。東京経済大学教授という肩書に収まらない、行動する知識人、社会的責任を負う人文学者の鑑としての姿勢に頭が下がります。今回はキリスト者中心の集まりでしたが、話をうかがった私たち一人ひとりが、心情的イスラエル支持者が多いキリスト教会の仲間たちに対し、何を語りかけ、何を呼びかけていくのか、重い課題を受け取ったように思います。

第2部の祈禱集会では、神戸に設置されたサテライト会場からの進行に従って、パレスチナ、ミャンマー、そして日本で暮らす外国籍の人びと、それぞれの痛みを覚えながら、イスラム教、仏教の信者の方と共に祈りを合わせるときを持ちました。個人的には、多様な個をつなげる祈りの力をあらためて強く感じる時間になりました。

## 第6回マイノリティ・ユース・フォーラム in 宮古島 《2024年3月25~27日》

共同主事 **デイビット・マッキントッシュ**

沖縄島と台湾の間に位置する宮古島では、1990年代後半から着々と軍事要塞化が進められてきた。「台湾有事」

を想定した軍事施設の拡大・新設は、宮古の平和な生活と美しい自然を大きく損なっている。離れた地からは見

奥間政則さん



えにくい宮古の今を知るために、再び琉球弧が戦場となることのないようにと声をあげる人々と出会うために、私たちにできることを共に考えるために、第6回マイノリティ・ユース・フォーラムは宮古島を訪れた。

フォーラムの学びは、2月26日、奥間政則氏を講師に迎えたオンライン学習会から始まった。2015年に知人に誘われてヘリパッド建設が進む高江を訪れ、基地の問題を「国家による暴力」と捉えるようになった奥間さんは、その後一級土木施工管理技師の視点から高江、辺野古、宮古における環境の問題や政府の嘘を鋭く指摘してきた。学習会では「沖縄ドローンプロジェクト」などで集積した辺野古の画像データや、環境破壊をめぐる運動や訴訟について話していただいた。「きっかけさえあれば、無関心な人も変わる。これを私自身が体験した」と語る奥間さんは、宮古島で待ち受ける人、経験、気づきに私たちを備えてくれた。

3月25日、各地から日本基督教団宮古島伝道所に集い、開会礼拝からプログラムを始めた。同教会の坂口聖子牧師はメッセージで、ルカ2:14「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」を読み、尊い命と生活の平安を脅かす基地建設やミサイル配備について言及した上で、ユダヤの民がそうしたように、過去を振り



坂口聖子さん

返り「後ろ向きに」進みながら、いま私たちがどうすればいいのかを考え、平和のためにできる「神との共同作業」をそれぞれの場でやっていくよう呼びかけた。

夕食後の講演では、上里清美さんが、宮古に生まれた者として、キリスト者として、遠い地から来て宮古で性奴隷とされた女性たちのことや、宮古島民も軍人も戦時中に経験した飢餓のことなどを憶えて今に伝え、九条の会や日本軍「慰安婦」問題を考える宮古の会で平和活動を続けることの大切さを話した。「過去を見つめながら、置かれた場で、でき

ることを」との坂口さんの呼びかけを体現するようで、深く感銘した。

翌26日は、バスに乗り、清水早子さん(ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会)をガイドに迎えてフィールドトリップに出た。美しい自然のスポット、戦争の悲惨を記す碑、数々の自衛隊施設、訪れた一つ一つの場所で清水さんは、「安保」トークで島民を怯えさせ建設ラッシュの利権で分断してきた国家に対する怒りと不審を伝える一方で、宮古に派遣されてきた自衛隊員については、「同じ力によって騙され利用されている、軍人も含め誰も死なせてはいけない」と、慈悲の眼差しを見せた。1日で隅々まで行ける小さな、一見「平和」な、宮古島にこれほど多くの軍事施設が集中していることを自分の目と耳で確かめた参加者は、驚きを隠せなかった。



清水早子さん

教会に戻り、小グループに分かれ、一人ひとりが次の問いに応えた。プログラムの中で特に私の印象に残った言葉や場所は？それは、私の生活とどのように繋がっている、あるいはギャップを感じさせる？何か新しいことをやってみたい、できるかもしれないと思ったことは？互いにことばを聞きながら、「そうだ」と頷くことも、「それは考えなかった」と新たな視点を与えられることもあり、より深く知りあえる機会となった。

最終日は、教会近くのばいながまビーチで、おにぎりのピクニック朝食から始まった。曇り空で「宮古ブルー」の海は見られなかったが、海に足をつけたり(泳いだ人も、約1名)、浜辺に転がるサンゴを拾ったり、くつろぎと笑顔の時間だった。最後の全体会で私たちは、宮古で知っ

→P.7につづく

渡口の浜



# ユースフォーラム 参加者の声

## 鎌田麟太郎 同志社大学 政策学部

私がマイノリティユースフォーラムで大切だと感じたことは「差異を見つめる」ということです。具体的には、沖縄の問題と言っても、本島だけでなくそれぞれの島固有の問題があることを知ることができました。このことからマイノリティという言葉で一括りにせず、一つ一つの問題に向き合っていくことの大切さを学びました。

## Yoshi 同志社大学

#ことば #miyakofuture # 差異を見つめる - 慰安婦としての性的に搾取された女性たちのために建てられたアランの碑を見ているときにひとつ気づいたのは、私たちが碑を見て知ることができるのは、語られなかったことばがあることであって、語られなかったことばそのものではない、ということだ。決してそれはありえない。語られなかったことばは、すくなくとも最初語られるべきであったような形では、もう二度と語られることはない。だから発されることばが、社会的地位や、立場や、国籍、住んでいる場所、などが理由で聞かれない、ということがあってはいけない。すべてのことばをあらしめなくてはならない。基地に対してあげられる声は何度も無視された。いくつもなかったことにされたことばがあることだろう。

私は基地の正門前のスタンディングに参加したが、基地の中に見えていた人たちにはどれくらい、清水さんたちの声が聞こえていたのか。あまりにも無視することに慣れているのかもしれない。同じ日本国政府に統治される者として、あの自衛隊基地に何らかの関わりを持って（しまつて）いる者として、宮古島の未来について考えていかなければならない。

## DEBORAH TUN (きく) 高槻バプテスト教会

今回のユースフォーラムを通して実際に、宮古島に足を運んでみて少なからず宮古島、沖縄で今何が起きているか、より深く知ることができました。1番感じたことは島や人の暖かさ、自然の美しい景色やパワーでした。綺麗なままであって欲しいと強く思いました。沖縄と宮古島は、今の日本の平和の鍵を握っていると私は思います。日本が平和であるためには、沖縄、宮古島がまず平和であることが欠かせません。私は「希望の地」というハッシュタグを選びました。宮古島はもちろん基地も抱えていますが、希望や平和がそれに打ち勝てるように自分ができることは何かを考え、行動に移したいです。



上里清美さん

## Taiyo 同志社大学

宮古島を守りたい - 今回のユースフォーラムで学んだことは沢山あった、自衛隊の基地が市民の了承を得ることなく作られたこと、集落の近辺に射撃訓練場があり弾薬庫が置かれていること、本当に今までの経験から想像もつかない話を聞いて、驚くことが多かった。

その中でも1番の思い出はスタンディングに参加したことだった。基地の前と、スーパーの前でやったが、やはり基地の前で訴える時は緊張した。弾は入ってなくても銃を持つてる人を見るだけで怯んだ。スーパーの前では、車から会釈してくれる人がいて少し嬉しかったし、自信をもらえた。

訴える気持ちが一人でも多くに伝わっていればいいと思った。

やはり宮古島は自然豊かで海が綺麗だった。このような場所を自衛隊に好き放題に使われ、戦力を増強させるために使われるべきではないと思った。市民の意見に耳を傾けることが出来なくなれば、これからさらに良くない方向へ進んでいくかもしれないと思わされた。

## ラッキ

#希望の地 - 基地は人を守れない、基地は戦争のはじめではないか、と思いました。日本政府のひとたち、自衛隊員たちに、島に住んでいる住民たちが望んでいるこの豊かな自然環境を戦争の色に染めないようにやって欲しい、と思いました。

## Lanihu 台湾基督長老教会

違いとは、何でしょう。立場や見方、文化、民族性、思想などの違いがありますが、これらに正解、不正解はありません。他人に妨げられたり制限されたりすることなく、誰もが自分の意見を表明することができることは貴重なことであり、言論の自由として憲法が国民に保障するものです。異なる声を常に伝え合い、理解し、互いのアイデアを結びつけてまとめ、問題やアイデアを伝えることは必要です。宮古島の基地問題に対する反戦と平和の声が全ての人に聞き入れられることを願います。

## 小野寺美穂 同志社大学神学部

これまでの私は沖縄における基地問題は、「沖縄問題」と捉えていました。しかし、それぞれの島ごとに問題が存在していることを今回の視察で学びました。一括りにできないということです。

経験したこと、見たこと、聞いたことは熱く私の中に大きくあり、今も会うひとと会うひとに宮古島での出会いや出来事を話しています。

みんなで#を考えたとき、暗く終わるのではなく、ポジティブなものにしようと、「希望の地」を選びました。

宮古島で目の当たりにした問題やそれぞれが抱えている不安も、私たちが生きている同じ世界の中、つながっている中で起きていること。みんなで共感した希望を持ち続けながらそれらの問題の解決に貢献していけるように学び行動していきたいと、これからの私の行動が変わる体験をしました。

## 斎藤成二 CMIM 運営委員

宮古島が世界平和のための最前線であることを実感しました。その地で地道に平和の取り組みをされている方々に心から感謝と敬意を表します。離れた地にあってもその方々を孤立させないような連帯の取り組みを作る、あるいは既存の取り組みに参加する、そういった具体的なアクションが求められていることを自覚します。

みんなで楽しく過ごした宮古島での時間が、本当に何の憂いもなくこれからも楽しんでいける、そんな平和な未来を望みます。ヤマトと沖縄・八重山の間にある差異は、今日まで続く支配・被支配の関係を示します。それはこの日本の社会における、あらゆる差別・被差別の関係性にも置き換えられます。その関係を友愛と連帯の豊かな関係性に変えていくにはまだ多くの時間を要するでしょう。しかし今回出会った現地の方々そして参加者のみなさんと一緒ならば、挫けずに取り組んでいけるように思います。

## Megu 大学生

今回のフォーラムを通し、「事実」としての基地問題だけでなく、「おもしろい」としての基地問題を感じることができました。清水さんがそこで語られた「ことば」、その地に刻まれた「ことば」、対話・ディスカッションの中でそれぞれが共有した「ことば」があったからだと思います。清水さんが語られた覚悟の中では、誰も傷つけない希望の地へ進んでいく宮古島の「miyakofuture」を強く感じさせられました。今だけ、また自分だけが大丈夫なら良いのではなく、自衛隊の方に、これからの宮古島に目を向ける姿は非常に印象的でした。清水さんが覚悟をもって、マイノリティとして基地問題に向き合われたように、私も日常にはびこる問題に敏感に向き合っていきたいと感じました。何を「minority」とするかは、人によって、感じ方によって異なると思います。ただ、人との違いを認める、「差異を見つめる」ことが平和な未来を築くのではないかと強く感じました。

## ことの 日本福音ルーテル教会

宮古島で起きている、多くの問題を私は知りませんでした。知らなかったこと背景には複雑な要因があると感じましたが、今回現地で多くの問題を見て聞くことができました。

住んでいるところが遠いことや知らないことで、この問題が他人事になってしまいます。しかし、問題を知った今は他人事ではいられなくなりました。これからも関心を持ち続け、私にできることを模索していきたいと思っています。

今回のフォーラムの中で聞いた言葉、平和への実現にはこうしてユースが集い、多様な背景を持つ仲間と交わりを持つことがとても重要だ、ということを中心に留めてこのようなチャンスを増やしていきたいです。多様な仲間とことばを交わし、互いを知ることの大切さをより実感しました。

ハッシュタググループ



## Ashley Keeping カナダ合同教会

カナダ合同教会の Indigenous Ministries (先住民ミニストリー) との関わりを通して宮古島を訪れ、そこで素晴らしい出会いと、世界を見る新しい目を与えられました。出会ったお一人、宮古島教会員の徳永さんは、10歳の時に東京の空襲を逃れて、とても寒いところに疎開し、そこで毎晩泣きながら寝たのだそうです。亡くなられた夫もまた、出身地の長崎で原爆を生き延びた方でした。「いま住む宮古で残された人生を平和に過ごしたい。どんどん進む基地の建設を止めなければ、いつかまた宮古が戦場となるのではないか」と心配しておられました。ユースフォーラムでは、様々な場所から人が集まって、思いや信仰を分かち合い、私たちの手で世界を変える可能性について話し合うことができました。そこで喜びと希望を与えられ、今後「友」と呼べる人たちへの愛を感じました。

一生忘れることのない経験を心より感謝しています。

## 遠藤純一郎 個人参加

わたしは、宮古島に新しく自衛隊基地ができていくという話が気になって今回のツアーに参加しました。実際に参加してみて、この島が軍事的に利用されることは、今に始まったことではないということを知りました。バスに乗れば、すぐに端から端まで移動できる島に、飛行場が三つもあったという事実には驚きました。

長らく戦争に利用されてきた場所が同時に観光地でもあり、そこで着々と戦争の準備が進んでいることを知らずにいられることをこそ、よくみつめなければならぬと強く感じた旅でした。

## つるやま 日本YWCA

「宮古島は沖縄島とは違うんだよね」ということばが印象に残っています。気候、風土、美味しい食べ物（宮古島にはハブが出ないのかも！）はもちろん、沖縄戦の惨状や基地の在り方も、まったく違うことを学びました。自らの加害性を知り、琉球弧に想いを寄せたいというつもりで「沖縄」「基地問題」と、安易に一般化しながら認識しようとしてきた、自身の傲慢な臨み方にも気づかされました。フォーラムで出会った一人ひとり、お話をしてくださった方、島民の皆さん、はたまた自衛隊基地で働いている方にも、それぞれの想いがあります。それぞれの差異をみつめ、喜び、向き合いつづけたいと願います。知った！学べた！よかったね、で終わらず、当事者の一人として生きることを、選択し続けていきたいと誓う旅になりました。「希望」という言葉は、これまでそれを奪ってきた側 / 持てないような状況を強いてきた側が、使ってもよいのか？ と思うことがあります。これから、出会えた方々と繋がるなかで、miyakofuture をそれぞれのことばをもって話し続け、連帯していきたいと思っています。

## ひかり 学生

宮古島で3日間過ごして、印象に残っている事は沢山あります。とてもキレイな海だと思っていたら、「ここで軍の訓練が行われる」と教えられ、こんなにも綺麗な場所ですんなりとは信じられず、驚愕しました。

また、様々なバックグラウンドを持つ人達と沢山話す事ができ、新しい知識や考え方を学ぶことが出来ました。とても貴重な体験が出来て嬉しいです。私は内向的で、人見知りで、でも心の中ではみんなと仲良くしたいと思っていました。だから、知っている人が1人もいないこの場に参加することは、私にとっては大きな挑戦でした。参加して、成長できた、有意義な時間だったと感じています。本当に参加して良かったと思っています。学校生活、またその後の人生にも、このユースフォーラムで学んだ事を活かしていきたいと考えます。



ばいながまビーチで

## Kaeun Moon 早稲田奉仕園 友愛学舎

宮古島のひとたちが、叫びの声と憤りの声をあげつづけていることに、恥ずかしながら20歳になって初めて気づきました。軍事基地は拡大し、宮古島のひとびとが守護しつづけている御嶽(うたき)が、黒いシートで覆い被されていること。基地の目の前には、銃を持った軍人が立っていること。そして正面にはメロンを栽培するひとびとの生活の暮らしがあること。ひとを死なせるものと生かすものが同じ空間を共有していることに違和感を感じました。宮古島のひとびとは、誰よりもまず死と生について考えておられ、私たちが平和で幸せに暮らすことができるよう待ち望んでいるということに、はっと気付かされました。宮古島から受け取ったこの記憶と衝撃を継承していくことができるように心に刻み、未来の展望について深く考えていきたいと思っています。

## イさん 多良見教会

宮古島では自衛隊基地が建設され、地域の人々に痛みを与えています。しかし諦めずにお互いにことばを通してお互いの差異を見つめることができるなら、宮古島の未来は希望に変えられると信じます。宮古島は希望の地です。宮古島は平和の地です。

## →P.3より

たこと、考えたこと、宮古から世界に伝えたいことを、SNSなどで発信できる「#」ハッシュタグに詰め込む作業をした。ポストイットに書いた沢山の言葉から、小グループでいくつか選抜し、これを繰り返して次の4つのハッシュタグを「みんなのことば」とした。# ことば、# 差位を見つめる、#MiyakoFuture、# 希望の地。そこに込められた経験、想い、考えは、参加者のリフレクションから読み取れる。

閉会礼拝では、マキンサンサンアウン運営委員のメッセージの後、参加者数名が感想、連想、今後への想いを語り、最後に声をあわせて歌を歌い、祈りをもってプログラムを終えた。

出会いと学びの場を整えてくださった坂口さん、尾毛さん、講師の皆さま、ユースに会いに来てくださった教会員の方々、また特別献金で数名の参加を叶えてくれたアトウトウミャンマーの皆さまに、心より感謝を申べたい。

宮古島で平和を作ろうとしている人たちは、肩を並べて声をあげる友に励まされる。読者もぜひ、「んみゃ〜ち」(よ

## Mulas 台湾基督長老教会

スタンディングに参加して — 第二次世界大戦以後この地に戦争がないことを、宮古住民は誇りに思っています。しかし、軍事基地の設立により、宮古は今戦争の岐路に立たされています。子どもがかつて遊んだ場所は軍事施設の柵に囲われ、美しいビーチは軍事訓練の場になりました。これらのことが地域社会を圧迫し、住民の憤りを呼び起こしています。初めて宮古を訪れた私にも、現地の方々の大変さやフラストレーションがよく分かりました。しかし、台湾の状況と政治の絡み合いを考えると、複雑な側面が浮かび上がってきます。宮古島民のほとんどが反戦・反基地の訴えに賛同しているのに、スタンディングに立つのはごく少数です。だからこそ反戦グループは、より強い姿勢でこの問題に立ち向かわなければいけないのかもしれないと思いました。

最初はお断りした私がマイクを握って話したのは、反戦活動をしている人びとを励ましたかったからです。話した後、たくさん笑顔と感謝の声が見られました。民主主義と民族自決に基づく声をもっと多く表明され、抵抗の声が大きく意味あるものになることを願います。

うこそ)と迎える人が待つ宮古島を訪れて頂きたい。  
神に栄光、地に平和あれ。

## フィールド・トリップの訪問箇所

<伊良部島>長山港(海上保安庁の巡視艇数隻の港)、渡口の浜(日米合同上陸演習の場に指定された美しい浜)、下地島空港(民間施設の軍事への転用が懸念される)、佐和田の浜(過去の津波が形成した不思議な風景)、白鳥崎(昨年4月に自衛隊ヘリが墜落した海を見下ろす場)

<宮古島>ビュッフェレストラン太平山(宮古島空港の隣)、陸上自衛隊宮古島駐屯地(ゲート前平和活動、基地内に見える御嶽や軍事車両などについて聴く)、航空自衛隊宮古島分屯基地(対空レーダー、電子戦用施設)、アリアンの碑(日本帝国軍によって性奴隷とされた女性たちを偲ぶ)、高澤義人歌碑(宮古で飢えをみた軍人の一句が刻まれた、アリアンの碑と並ぶ碑)、陸上自衛隊保良訓練場(民家の近くに造られた弾薬庫と、射撃訓練場)、東平安名崎(宮古島随一の絶景スポット)